

平成27年度第 11回講演会 記録

日 時	平成 27 年 9 月 26 日 (土) 13:00~16:00
会 場	此花会館・梅香殿ホール
講 師	北海道大学水産科学研究院教授 笠井 亮秀
演 題	森と海をつなぐ河口域生態系を探る
備 考	参加者数 163名、 記録 李三 文作

本日の講師は少し変わった経歴の持ち主で、難関の気象大学校を卒業後、気象庁には入庁せずに海洋学の研究に取り組み、2015 年より北海道大学水産科学研究院教授に就任されたとのこと。講演も終始客席と対話しながら進める、今までにない形で行なわれました。



- 「河口域とはどんなところか？」と講座生に質問、講座生は戸惑いながらも“汽水域の所”、“三角州があるところでは”など答えに対し講師が解説、このようやりとりをしながら河口域とは何かを学びました。
 - 河口域とは
 - ・河川水が海に流れ込むところ
 - ・淡水と海水が混合するところ 塩分が変化すること
 - ・栄養塩（窒素、リンなど）や有機物、土砂などが流れ込むところ
 - ・塩分の変化に強い（広域性の）様々な生物が生息するところ
 - ・川の生き物と海の生き物がいきいきするところ
- 次に、「海と川の境目はどこですか」由良川、淀川、等々の図を提示し講座生へ質問し解説されました。
 - 1 級川と海との境目は国土交通省が決めているとのこと
- 汽水域での「塩分濃度の分布を測るとどのようなになっていると考えるか図を書いて下さい。」
 - 海水は塩分を含んでいるため重く、川の下面に広がっており、上流遠くまで海水が入っている。潮汐の小さい日本海側の川と潮汐の大きい太平洋側では分布は異なるとのこと。
- 「どのような河口域が良い河口域と考えるか」と河口域の生態系サービスについて質問と解説。
 - 生態系サービスとは、地球上の各地域の大切さを、経済的な価値に換算したものである。
 - ・供給 食料や水などの生産・提供
 - ・調整 気候などの制御・調整
 - ・文化 レクリエーションなど精神的・文化的利益
 - ・基盤 栄養循環や光合成による酸素の供給
 - ・保全 多様性の維持、不慮の出来事からの環境の保全
- 海の環境悪化を食い止めているのが河口域に形成される干潟といわれている。河口域生態系の中でも近年注目されているのが二枚貝である。水中の有機物を大量に濾過することで水質の浄化に大きく貢献していると考えられている。そのために二枚貝の水質浄化能力を評価するためその食性を調べる。二枚貝の餌を推定するために安定同位体比分析を利用する。その結果、アサリの餌は植物プランクトン・底生微細藻類であり陸起源有機物をあまり餌としていない。汽水域に生息するシジミ（日本にはヤマトシジミ、マシジミ、セタシジミの3種類）は陸起源有機物（海・川の懸濁物）を餌としていることがわかったとのこと。干潟の重要性がよくわかりました。
- 最後にまとめがありました。
 - ・巷にあふれる情報を鵜呑みにしないで、ちょっと考えてみましょう。
 - ・大阪にも自然は残されています。自分で足を運んで自然に親しみましょう。